

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省特別郵便第三五二号
 昭和三十五年三月十五日印刷 昭和三十五年四月一日発行

第二十六卷

第四号



四月号



既刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B 六版・十六頁
定価十五円・十八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 本願の不思議にて
3. 人生は信ずる心からすべてを包む愛

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B 六版・三十一頁
定価二十円・二十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもの
3. 信ずるところ
4. 美わしき世界の建設

甦えるいのち

A 五版・二十七頁
定価三十円・二十八円

惻々と人の心をつつ失明の体験
文学の世界からみた無常の話
宗教の信仰を遺文にみる

森 赫子
武田 泰淳
佐藤 賢順

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二二八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

浄土 四月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

ゴータマ・ブッダの誕生……中村 元……(2)

釈尊誕生と仏伝……宮林昭彦……(7)

西方浄土變と阿弥陀三尊像……北川桃雄……(10)

素人平和論の罪……木谷 昭……(26)

身辺雜記⁽⁴⁾

日曜の夜……森 赫子……(16)

高僧伝日野靈瑞……大橋 俊雄……(24)

法然上人の感化……村上 博了……(30)

新編百喻經⁽⁴⁾……伊 東 拳 位……(15)

信仰相談……須 藤 隆 仙……(32)

石川啄木(3)……須 藤 隆 仙……(18)

扉の御法語……(22) 物と心と……(9)

小さなシツゲ……(28) 会員だより……(40)

仏教習俗覚書(1)……中村 康 隆……(34)

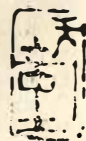
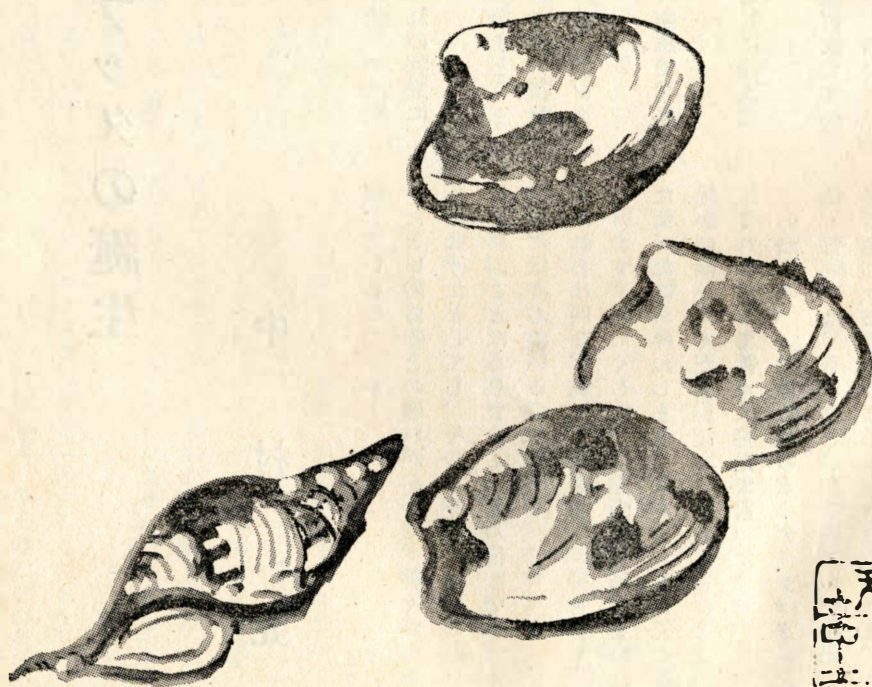
—花まつり— その他—

浄土

四月號

末法には、聖道の行人自然に虚偽こぎを懷いだき、念仏の行者多くは至誠しじようなり。浄土門の少虚こは、機きの過とがにして、行体ぎやうたいの失しつにあらず。聖道門の多虚たこは、行法ぎやうぽうの咎とがにして、機きの失しつにはあらず。

法然上人御法語



ゴータマ・ブツタの誕生

中 村 元

『スッタニパータ』の中の「ナーラカ経」では釈尊の誕生の際にアシタという仙人が、かれの将来について予言をしたことを記されている。

『歓喜を生じ楽しんでいて清らかな衣をまとう三十人の神々の群（三十三人の神々の群）が、衣をとって恭しく帝釈天を極めて讃嘆するのを、アシタ仙は日中の休息に見た。』

日中の休息とは、食後における日中の休息で、多くは坐禅を行う。

『こころ喜び踊躍せる神々を見て、ここに仙人は恭しくこのことを問うた。――』

「神々の群が極めて満悦しているのは何故ですか？、何によって、かれらは、衣をとってそれを振り

廻しているのですか？

たとい阿修羅との戦いがあつて、神々が勝ち阿修羅が敗けたとしても、そのように身の毛の振り立つほど喜ぶことはありません。どん稀なできごとを見て神々は喜んでいるのですか？

かれらは叫び、歌い、楽を奏で、手を打ち、踊っています。わたくしは、須弥山の頂に住まわれるあなたにたにお尋ねします。釈尊よ、わたくしの疑いを速かに除いてください。」

これに對して神々は答えて言った。

「無比の妙宝であるかのボーディサッタ（未来の仏・菩薩）は、もろひとの利益安樂のために人間世界に生れたまうのです――シャカ族の村に、ルンビ

ニ一の聚落に。

だからわれわれは満足し、非常に満悦しているのです。

一切衆生の最上者、最高の人、牡牛のような人、生きとし生けるもののうちの最上者は、やがて仙人（のあつまる処）という名の林で（法）輪を転ずるであろう。——猛き獅子が百獣にうち勝って吼えるように。

仙人は（神々の）その声を聞いて急いで（人間世界に）降りて来た。そのとき淨飯王の宮殿に近づいて、そこに坐して、シャカ族に次のようにいった。「王子はどこにいますか。わたくしもまたお目にかかりたい。」

かくて諸のシャカ族は、鎔炉で巧みな金工が鍛えた黄金のようにきらめき、幸福に光り輝く尊い顔の児を、アシタという（仙人）に見せた。

火焰のごとく光り輝き、空行く星王（日月）のように清らかで、雲を離れて照る秋の太陽のように輝く児を見て、歡喜を生じ、大いなる喜びを得た。

神々は、多くの骨あり、千の円輪ある傘蓋を空中にかざした。黄金の柄のある扠子を上下に扇いだ。

しかし、扠子や傘蓋を手にとっている者は見えなかった。

カンハシリ（アシタ）という結髪の仙人は、頭上に白傘をかざされて赤色がかった毛布の中にいる黄金の飾具のような児をば、こころ喜び楽しんで抱き取った。

相好と神呪（ヴェーダ）に通曉せるかれは、シャカ族の牡牛のような（立派な児）を抱きとって（特相を）検べたが、心に歡喜して声を挙げた。——

「これは無上の人です。人間の最上者です。」
ときに、仙人は自分の行く末を憶うて、ふさぎこみ、涙を流した。仙人が泣くのを見て、シャカ族は言った。——

「われらの王子に障りがあるのでしょうか？」
シャカ族が憂うているのを見て、仙人は言った。「わたくしは王子に不吉の相があるのを憶うているではありません。またかれに障りはないでしょう。この人は凡庸ではありません。注意してあげて下さい。」

この王子は正覚の頂きに達するでしょう。

この人は最上の清淨を見、多くの人々の利益をは

かり、あわれむが故に、法輪を転ずるでしよう。かれの清淨行はひろく弘まるでしよう。

ところがこの世におけるわたくしの余命はながくありません。

中途でわたくしに死が訪れることでしよう。

わたくしは無比の力ある人の教法を聞かないでしよう。

それ故に、わたくしは、怨み非歎し、苦しんでいるのです。」と。

かの清淨行者（Ⅱアシタ仙人）はシャカ族に大きな喜びを起させて、宮廷から去って行った。

かれは自分の甥（Ⅱナーラカ）をあわれんで、無比の力ある人（Ⅱ仏）の教法に従うようにすすめた。――

「もしも汝が後に『仏あり、正覺を成じて、法の道を歩む』という声を聞くならば、そのときそこへ行ってかれの教えを尋ね、その世尊のもとで清淨行を行ぜよ。」と。

人のためをはかる心あり、未来における最上の清淨を予見したその聖者に教えられて、もろもろの善根を積んだナーラカは、勝者（Ⅱ仏）を待望しつつ、

みずからの感官をつつしんで住んでいた。

すぐれた勝者が法輪を転じたまうとの噂を聞き、

アシタという（仙人）の教えの実現したときに、行いて最上の人なる仙人（Ⅱ仏）を見てよろこび、最上の聖き行いをいみじき聖者に尋ねた。」

以上で、『序文の詩句は終った』とするし、次にナーラカが世尊に次のように呼びかける。

『アシタの告げたこのことばを、如実に了解しました。故に、ゴータマよ、一切のことがらの通達者（Ⅱ世尊）であるあなたにおたずねします。

わたくしは出家の身となり、托鉢の行を修そうと願っているのですが、おたずねします。聖者よ、聖き行い、最上の道を説いて下さい。』

これに対して釈尊が聖き行いを洗き明す。

右の序文の詩句は漢訳もないし、他の仏典のうちにも言及引用されていないから、『スッタニパータ』の中では新しい詩句である。しかし、散文で書かれた聖典より古いかたちを示している。これは後代の仏伝におけるこの伝説の原型或いは先驅たるものである。このアシタの話にはかなり神話的な付加があるが、しかし後世の仏伝ほどに極端に馳せてはいな



い。

なお後世の仏伝によると、母マーヤ夫人は産後七日たってから亡くなった、ということになっているが、經典のうちには何も記されていない。しかし、わざわざ特殊なこういう伝説が伝えられたのであるから、産後まもなく亡くなったということは恐らく事実であつたろう。

釈尊の誕生の土地は周知のごとくルンビニー園として知られているが、古い詩には、『ジャカ族の村、ルンビニーの地方において』と記されている。これは歴史的な事実に違いない。何となれば、アショーク王の碑文がこの土地において発見されたからである。すなわちバステイ地方のデイルハの東北八キロメートル、ネパールの国境に近いところに、パダリヤという村があり、そこにルンミンディという寺院がある。そこを発掘したところ一つの石柱が見つかり、それはアショーク王の建てたものであることが判明した。その碑文には、

『神々に愛せられ温容ある王(ハアショーク)は、即位灌頂ののち二十年を経て、みずからここに来て祭りを行った。ここでブッダ・ジャカムニは生れた

もうたからである。そうして石柵をつくり、石柱を建てさせた。世尊はここで生れたもうた人のを記念するためである。V。ルンミニ村は税金を免除せられ、また八生産のV八分の一のみを払うものとされる。』

と記されている。

ともかくルンビニーに関することがらが発掘遺品及び碑文によっても確かめられるのであるから、少くとも古い詩句に出て来る他のことがらも同様に事実であつたらう。

ところで釈尊の誕生はいつのことであつたか、ということが問題となる。セイロン、インド、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジアなど南方アジアの諸国では、一九五六年から一九五七年にかけて釈尊の二千五百年の記念式典を盛大に行ったが、それは南方仏教の伝説に従つたのである。すなわち釈尊の入滅は西紀前五四四年であると考えているので、一九五六年から一九五七年がちょうど入滅後二五〇〇年目に相当するのである。釈尊が八十才まで生存していたという諸の一致した伝説を採用するならば、釈尊の誕生は西紀前六二四年であつたということになる。

世界中の仏教徒が一つの約束として、この年代を採用することは一向に差支えないが、学問的には、大いに疑問の余地がある。

ともかく学者によつて約百年の差違があるわけであるが、しかしインドの古代史の年代について僅かに百年の差しかないということは、年代の不明な古代インドとしては驚くべきことである。これは個人としてのゴータマ・ブッダの歴史性がほぼ確定したものととして、諸学者に承認されていることを意味している。

釈尊の誕生日に関しては、二月八日だという説も經典の中に出ているし、またインドではヴィシャーク月の後半八日或いは後半十五日と解する説の行われていたことを玄奘が伝えている。しかし《太子瑞應本起經》上、《仏所行讚》第一などでは誕生日を四月八日と記しているので、日本ではこれに従っているのである。

(文学博士、東京大学教授)

釋尊誕生と仏伝



宮 林 昭 彦

ば、かの母の生むところの子は、諸王中最勝たらん。

もし母人夢に、白象の右脇に入るを見れば、かの母の生むところの子は、三界にきわみなく尊く、よく諸の衆生を利し、怨敵のごとく平等にして、千万の衆を深き煩惱の海より度脱せん……………。

夫人の夢みるところ、その相はなはだ善し、大王、いままさに自ら夫人の産むところを慶幸すべし。必ず聖子を生まん、かれ将来において必ず仏道を成じて、名聞遠く至らん。」

四月八日、この日を迎えるごとに、うつくしい春の花々に飾られた花御堂のなかの誕生仏に、甘露の水をそそいで、釈尊誕生の日をここから祝福した幼き日のおもいでがなつかしく甦ってくる。そしてそのとき、説ききかされた、詩情ゆたかな神話的な釈尊降誕のものがたりは、幼いところにも忘れがたくやきついている。

いま、あらたに釈尊誕生の模様をうかがうとき、仏伝はかようにつたえかたっている。

ある夜、マヤ夫人が安らかな深い眠りにふ

けておられると、夢中に六牙の白象が現れた。頭はあざやかな朱色にして、金色にかがやける牙をもったこの白象は、澄みわたった空を紫雲に乗じてしずかに下りきたり、マヤ夫人の右脇より胎内に入ったのである。夫人は、不思議な夢から覚めて、このことを父王につたえると、父王は直ちに占夢波羅門を招いて夢占いをさせた。すると、

「もし母人夢に、日天の右脇に入るを見れば、かの母の生むところの子は、必ず転輪王とならん。

もし母人夢に、月天の右脇に入るを見れば、

という夢判断がかたられたのである。そののち、懐胎されたマヤ夫人は、身上安穩にして、いささかの悩みも害いもなく、知恵ますますかがやき、身も心も清浄であられた。そして日数えるごとに、欲望まったく失せ、五戒を常にたもち、意志も行為もすべて正しく信仰の念篤く、人々を愛し、悪をすてて善におもむき、なんの畏れもなく、いよいよ平和にして安楽な日々を過ごされた。

かくして、臨月近づき、インドの習慣にしたがって親里にてお産をするために、なつか

しい故郷に帰るみちすがら、ひとときルンビ

ニー園に憩うこととなった。その園は、丁度無憂樹の花々が爛熳とさききそい、ふくいくたる香りがあたり一面ただようていた。マヤ夫人は、あまりもの美しさにみとれて、花の一枝を手折ろうとなされたそのとき、夫人の右のわきの下から誕生された。ときに、大地は震動して、光明あまねくかがやきわたり、四天子たち手に香水をささげて、マヤ夫人のまえに立ちて

「唯然り、天母、いま聖子を生む、憂いを懐くなかれ」

とつげる。胎をいでたる菩薩の身は、まったく清浄にしてけがれなく、浄明の珠のごとくであった。

右脇より生れいであると、他の助けをうけることなく、四方に七歩つあゆみを進め、右手をもって天を指し、左手によって地を指して、声高らかに

「此れは即ち是れ最後の生身、天上天下唯我独尊」

と宣言されたのである。ときに、温冷二泉おのづから湧きいで、天地ともども聖者の出

現を祝福したという。

聖なる人の誕生をつたえる仏伝は、かようなことを、さらに莊嚴に、より華麗にものがつたっている。

しかし、いまのひとびとには、この神秘のペールにおおわれたものがたりをそのまま納得するであらうか。

このことを思いながら、神話的に粉飾された内面的な意義をいささかかんがえてみよう。

まづ、マヤ夫人の右脇より生れられたということである。古いインドの当時の思想として、階級によっておのおのその生れるところを異にしたようである。

「梵の頭よりバラモン生れ、脇よりセッテリー(王族)生まれ、腹よりベーシャ(平民)生れ、足よりシュドラ(奴隸)生れたり」

とも古いインドの書物はかたっている。釈

尊が脇から誕生されたとするのはセッテリーすなわち王族であることを意味するものであり、右脇としたのは、右を貴ぶ当時の習慣にしたがったものであろう。

釈尊が生まれおちると直ちに、七歩あゆまれたというのは、この比類なき聖者が地上に現れたということは、決して遇然的なできごとでなくして、過去七世において仏としての修行が成せられたのであり、この釈尊は第七生目の最後身であることを示すものである。また仏道を成ずるための七菩提分を意味するともいわれている。天を指し地を指されたのは人天の大導師であられる大いなる決意を示したものであろう。

さいごに、声高らかに獅子吼された誕生偈として有名な、「天上天下唯我独尊」のことであるが、このことは、数多くの仏伝がことばを異にしてかたっている。

「天上天下唯我のみ尊しとなす。要は衆生の生老病死を度するにあり」

「我は世界の主なり我は世界の長者なり、我は世界の勝者なり、こは最後の生なり、また後有をうくることなし」

かたられているのは、きわめて単純なことであるが、自覚の宗教としての仏教をつらぬいている本質的な意義が存するものである。

もとより、この宣言は、釈尊が久しき修行のち大悟されたときのことばとしてうけとらるべきものであらう。しかし、仏伝の作者には、この比類なき人の誕生は、あまりにも尊大であつたがために、常人とは甚だ異にしたと信じられたからである。

ともあれ、ここに誕生された釈尊が、わたくしたちと同じように、人間としての苦惱をいだきながらも、雄々しくそれを超克して、最高にして最善の人間の在り方、生き方を示されたという厳したる事實は、すべての神秘的なペールをこえて尊くかがやかしいことである。

このようにして誕生された偉大なる尊者釈尊は、ひろびろとした、おおらかなおちついた態度を以て人々を包容した。仏教は人間の心のうちに温い光をともしることが出来たのである。

四月八日 仏誕生に當って仏伝に従つてその模様をいささかなりともくみっていただければ幸である。

物と心と

最近マス・コミの世界で、科学技術の革命的進歩が強調されるあまり、人間の心のこと忘れられてゐるのではないかと、不安にも似た疑問がある。

現代は「変化の時代」などよくいわれる。そういわれてみると、なるほどここ十年ないし十五年の間に、私達日本人の生活も、ずいぶん変化したことに気がつくだろう。家庭に多くの電気器具がはいったばかりでなく、衣食住のすみずみに、戦前とはずいぶん変わったものを見つけることができる。飛行機も汽車も便利になつたし、自動車も狭い道路にあふれる有様である。

それらの変化をもたらしたものの多くのは、科学技術の発達によることはいふまでもない。オートメイションによる大量生産や、電子計算機などの「人工頭脳」の働きによって、私たちの生活は、これから急テンポで変化を続けてゆくことだろう。

「黄金の六〇年代」に、消費革命とか、生活革命を予測することは、そんなにむづか

しくないのだが、考えてみると、その変化は「物の面」にかたよつてゐるのではなからうか。

かたよつてゐるというような、なまやさしいことではない。実は、その科学技術が生みだした原子力はむろんのこと、月の裏側を見せた宇宙ロケットにしても、場合によっては、人類の生存に関する恐ろしい凶器となるものとして受けとられてゐるのが、現実である。いいかえると、この現実を、人間の心がどのように切り開いて行くか、つまり、人間が作りだした「物」と、人間の「心」との対決のときが、きてゐるといふてもよからう。

「科学技術は、百万人の人間の生命を、一瞬にして奪い去ることはできても、ただ一人の人間の心をも捕えることはできない。」これはある科学者の言葉である。物の面からばかり、宇宙時代とか生活革命という文字を理解するのではなく、心の面から、新時代と真剣に取組む必要があるだろう。「心の変化」を伴わない「物の変化」の独走が、実は、気がかりなのである。

— 朝日新聞より —

西方浄土変と阿弥陀三尊像



北 川 桃 雄

一 西方浄土変の表現

仏像の制作は仏教のはじまった古代インドからですが、最初はもちろん仏陀としての釈尊や、成道して仏陀となれる以前の釈迦菩薩像が主としてつくられたので、現在でもその遺品が発見されています。釈迦如来以外の阿弥陀・薬師その他の仏陀の像がその当時につくられたかどうかははっきりしていません。

しかし、釈迦像のつくられた西紀一、二世ごろには無量寿経・阿弥陀経もすでにつくられていたらしく、当然、信仰もされたでしょうから、阿弥陀如来の像もつくられたのではないかと思いますが、現在ではまだ発見されていないようです。

仏教はご承知のとおり、インドから現在のアフガニスタンや中央アジア（ソ連領、及び中国新疆ウイグル自治区、昔の西域^{きやく}地方）をへて、中国本土につたりましたが、この阿弥陀を教主とする西方浄土にかんする思想は、西域・中国したがって日本などのほうが、インド本土よりも流行したと考えられています。

中国で阿弥陀信仰が起ったのは、はやくも三世紀ぐらいからで、その像もつくられた事実が文献上からは推測されますが、彫刻も絵も残っていません。

中国において西方浄土にかんする思想がひろく行われ、釈迦三尊を中心としてその浄土の情景を描きあらわした西方浄土変相図（極楽変、浄土変、西方変相、浄土マンダラ、極楽マンダラなども称す）がさかんに制作されたのは、

じつに、唐代（七～九世紀）でした。そして、この時代に淨土思想の普及や淨土図製作上に大きな貢献をした高僧は善導大師でした。大師は子供のとき西方淨土図をはじめて見て、いたく心を打たれ、自分で描こうと決心して、三百枚も制作したとつたえられているくらいであります。その他にも当時阿弥陀淨土図がさかんに描かれたことはいろいろの文献から知ることができます。たとえば、唐代の美術論書として名高い張彦遠の「歷代名画記」という書に

は、当時の首都の大寺院における名匠のかいた壁画類については記録していますが、その中に当時の大家呉道子が安楽寺の壁画として西方變相をかいていることを誌しています。また、これも名家の苑長寿の西方變がすこぶる優作で、池水や人間がまるで壁上に浮びでているようだと言っている書もあります。

唐代芸術が世界美術の中でもいかに優秀高度のものであったかは、それを手本としたわが国の奈良時代の美術遺品からも推測されますが、惜しいことには前述の唐都の寺院壁画はすべて消滅して現存していません。

しかし、さいわいにも当時の壁画、しかも西方淨土變を多数に昔どおり残している所があります。それは中国甘肅省の西端にある敦煌^{トシホアン}の石窟寺です。



阿弥陀如来像（平等院鳳凰堂）

ここは中国本土から遠くはなれた沙漠地帯ですから、いろいろの意味で消滅をまぬかれたのでしょう。現存する敦煌約五百の石窟内壁画のうちで、唐代のものももっとも多く、唐の中でも西方淨土變がもっとも多いわけです。このことは、やはり、当時の中国における淨土教の流行やその図の盛んだったことを十分語っています。

私はこの敦煌石窟を訪ねた少数の日本人の一人ですが、

西方変をふくんで壁画のことも拙著「敦煌紀行」のなかで、その印象をかいとおきましたので、委しいことはここでは略しますが、じっさい、五十年前に撮されたペリオ探検隊の写真でしか知らなかった壮嚴な浄土図の実物には一驚を喫しました。

それは阿弥陀三尊を中心に、その周囲に二百にあまる菩薩・天部・声聞衆そのほかの聖衆背景の宝殿・宝楼・宝閣・宝樹、空中の飛雲飛天、天華、前景の蓮華うるわしく水きよらかな極楽の宝池など、さながらに観無量寿經にえがかれる極楽を造形化したものであります。

中国の浄土図の制作は宋時代（十―十三世紀）にも、白蓮社の浄土教運動によってさかんでしたが、むしろ唐仏画の影響をうけて発達した奈良以後の日本のほうがさかんだったといつてよいかも知れません。

奈良時代にはご承知の失火で焼けた法隆寺の壁画中の西大壁の西方浄土変をはじめ、薬師寺講堂の刺繡仏画、阿弥陀院、興福寺、光明皇后七々忌に国毎に制作させた浄土変などのあったことが文献の上では知られていますし、げんに不完全ながら当麻寺^{たいまじ}の当麻マンダラが遺っています。そして、この当麻マンダラは觀經に述べられる浄土光景と一致することは、すでに学者研究者の説くところでありま

す。

平安時代にも法成寺はじめ諸大寺や阿弥陀堂にえがかれ

ましたが、現存作では九州の富貴寺内に不完全ながら残っているほかほとんど消滅しています。

この西方浄土変から一步進んで、阿弥陀来迎の図というものがある。これは図様からいえば浄土図に附属する九品往生図の一部が発展したとみられるものですが、三尊来迎、二十五菩薩来迎、山越阿弥陀^{やまごしあみだ}、早来迎^{はやらいごう}など各種の来迎図、来迎マンダラを生みました。山越阿弥陀などは日本独得のものといつてよいかも知りません。

しかし、西方浄土変の委しいことについては別の機会にゆずることにして、ここには特に阿弥陀三尊の像だけに ついて、かんたんに述べておきたいと思ひます。

二 阿弥陀三尊の像

觀無量寿經の第二章に釈尊は阿弥陀如来のことを述べ

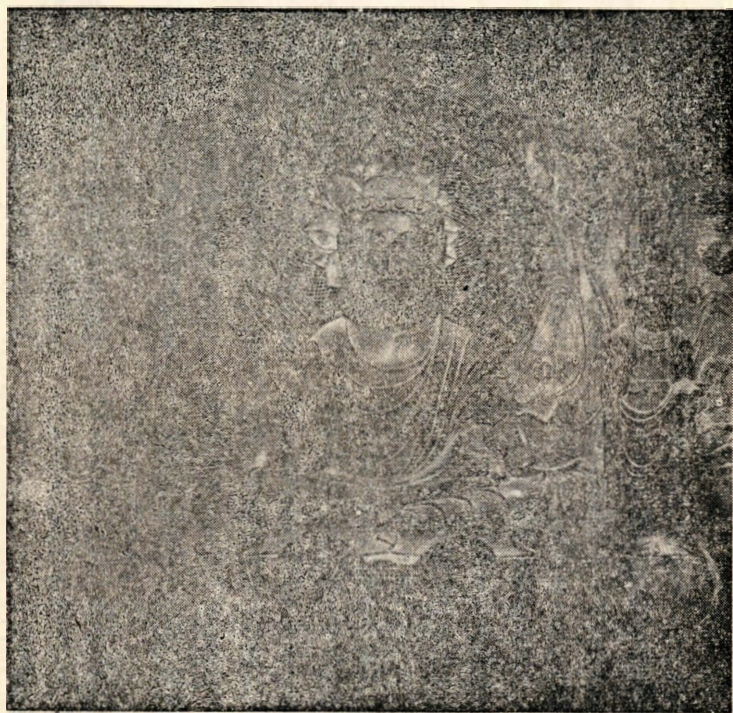
て
阿弥陀仏は神通意のごとく、十方の国々に自由自在に姿を変えてあらわれる。或いは虚空いっぽいに満ちるような大身となつてあらわれ、或いは丈六八尺の小身となつてあらわれるが、いつもそのあらわれる姿は純金の色をおびている。

とあります。

仏像仏画として表現された阿弥陀如来は、他の如来像と

同じく、釈尊の出家姿をおもわせる簡素な僧形であり、諸菩薩のように宝冠・首飾りその他のアクセサリーを一つもつけていません。古代インドで当時僧侶がああいう服装だったかどうか判りませんが、初期のインドの佛像からみて、だいたいあのような服装であり、西域・中国をへて日本でも伝統的にあの形式を踏襲したのでしょう。また、一般人以上にすぐれた存在者の象徴として、額の白毫とか、長い耳とかいうような肉体的特徴をもっていることも他の如来像と共通しています。

さて、この西方浄土の主たる阿弥陀は多くの場合、その左に観音、右に勢至の両菩薩を脇侍としてあらわされていますが、經典によれば、この両菩薩が阿弥陀如来の脇侍と



橋夫人念拝仏 (法隆寺)

されるのは、極楽即ち西方浄土で多くの菩薩のなかで最高位の菩薩だからと理由づけています。尤も、そのどちらが左に立ち、どちらが右に立つか、かならずしもその位置は確定していないようです。この三尊が一基三花の蓮華の上に左に観音、右に勢至が位置すると説いているのは観無量寿経ですが、一説にはその理由を「観音は悲にして下化衆生、勢至は智にして上求菩薩の義なるがゆえなるべし」とあります。

たいていの場合、観音は宝冠の正面に化仏^{けぶつ}をつけていますが、平安時代からのわが国の仏画では観音は両手に蓮台を、勢至は合掌している姿に表現されているのが多いようです。もちろん、そうでな

い場合もあります。

前者の例として、主要な作品をあげれば、大和の法華寺の来迎図や高野山の二十五菩薩来迎図などであります。

阿弥陀三尊像は前記の西方浄土変を一々こまかにかいていたのでは大へんなので、その中心になる三尊だけをとりにだして、これに代えたものでしょう。したがって信者は当然にこの三尊の姿とおして、その浄土の雰囲気をも感得すべきでしょう。

法隆寺の壁画西方変なぞは、蓮華上の三尊の周囲に往生者がかかれています。これは大へん簡略化されてきた一過程を示しています。彫刻ではもちろん絵画のように、こまかに浄土変をあらわすわけにゆきませんから、三尊像をならべるだけで、これによって三尊の安住する極楽世界をも想像しなければなりません。その意味では、法隆寺にある橘夫人厨子^{たちばな}とよばれているお厨子におさめられている同夫人の念持仏だった阿弥陀三尊像は、かあいらしい小さな金銅づくりの三尊で、しかも極楽の宝池から咲く蓮華上に坐し、そのうしろには同じ金銅づくりのやさしい天人を透しぼりした背障をたてています。これが現在日本にのこっている最古の三尊像といってよく、また、芸術的にもきわめてすぐれた作品であります。

浄土思想のさかんになった平安時代から鎌倉時代にかけては、すぐれた阿弥陀像だけでも二百六、七十体算えられ

ます。なかでも代表的な阿弥陀像は宇治平等院の鳳凰堂本尊です。この像は当時の仏師定朝^{ちやうてう}のつくったもので、まことに日本人の感情にふさわしい優美平明な姿に慈悲の権化を示しています。この定朝ふうの阿弥陀像は藤原時代に流行して、今でも日野の法界寺その他のこっています。いずれも感傷的な美しさに、日本特有のもの、のあはれをおぼえさせるので、そこに他力本願的祈りの投影された造形が考えられます。

阿弥陀如来はその抱く理想や功德によって、九種に分つ場合があり、これを九品仏^{くほんぶつ}と称されていますが、それを彫刻化した最古の美しい像は、京都府下の淨瑠璃寺内の細長い本堂に安置されている九体仏でしょう。もっと後世のものですが、東京にもその遺例があります。しかし、東京附近で最も有名な阿弥陀像は、誰しも知っている鎌倉の大仏で、高德院の本尊です。あれは鎌倉時代につくられたブロンズ像で、芸術的にも大へんすぐれています。もちろん、昔はりっぱな拝堂の中にあつたのでしょう。与謝野晶子の歌に「鎌倉やみほとけなれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな」とありますが、口調のためか、無知のためか、釈迦像は誤りであるわけです。絵画では前述の法隆寺・法華寺・高野山・知恩院早来迎などの名画のほか阿弥陀如来の姿はおびただしくかかれています。紙数に限りがあるので、ここには略させて頂きましょう。(共立女子大学教授)

新編 百 喻 經 (4)

一〇 達人になるため

昔、中国に、紀昌という、弓の達人がいた。彼は、自分の師である飛衡に、弓術の教を乞った。

「先ず、まばたきをするな」といわれて、その練習のために、三年の時を積んだ。

ようやくそれができると

「小さなものが、大きく見えるように練習せよ」

といわれ、更に五年の時を研修した。そしてようやく、充分に見られるようになった時、飛衡は

「ようやく一人前になった」

といって、許された。斯くしてようやく、

達人となることができたのだ。

長い修練の時があつて、はじめて人に見られるものができる。

一一 インチキ

宇治拾遺物語に、こんな話がある。

昔、五穀を食べず、行をしているという僧があつた。時の帝が、深く尊敬せられていたが、ある時公達があつまつて

「五穀を食べなかつたら、どんなく、そをするだろう」

と、廁に行つてみると、一般の者と変りが無いので、あやしいと思つて、調べたら、畳の下から、袋に入れた、米が出てきたので、公達は

「こくくそ聖」

といつて、笑つた。

どうも一度、体裁ぶつてしまうと、次々とかくしていかなばならないので、さぞかしつらいことであらう、愚かな事なり。

一二、墓穴の本

Sの家から、今朝も、夫婦げんかの声が、きこえてくる。

理由は毎度のこと、今日も同じ原因だ。

Sが妻君にねだつて、質草をもち出し、競輪の資金を、作ろうというのだ。

「今日はすぼしでいけるんだ、チョイとあたりや、こんなもの、何でもねえんだ、いいから出せよ」

Sは、以前相当なすし屋を、やってたのだが、フトした機会に、競輪を知り、それからズルズルと深入りして、損を取り返そうとして、追い目、追い目と損をして、店を失い、家財を失い、信用を失い、それでも更に目がさめず、相変らず、車券を破いている。世間には、此の愚かな投資家が、意外に多いようだ、あなたの近所にも、いませんか。

(伊東肇位)

日曜の夜



森 赫 子

親夫婦と兄夫婦と、弟はフィアンセと三組の男女が今日は集って食事を共にしている。

「だから、例えば夫婦の間でも二人が一つではなく、一人一人、人間は皆別々なんだ。一心同体とか、死なばもろ共なんて考え方がいつも家庭の悲劇を繰返す事になるんじゃないのかな。片親がどうかすると、自分の半分がどうかしてしまったように、残された片方も不幸になってしまう。」

妻は夫の為、夫は妻のためといった犠牲的精神より、もっと自分自身の為に自分を

成長させ、幸福にする為に、欲張りになつていいんじゃないかな。或る面ではいつもお互いに競争し戦いあっていいんだと思うよ。それでなければ、一人が失敗した時にも本当に相談し、助け合う事だって出来やしないもの。

だからやっぱり、人間は一個だと切り放してしまった処から、何処かの一点にしっかりつながりをつけていく事なんじゃないかな。人間は一人づつだよ。」

総領息子の意見をきき乍ら、母もうなずいて考えている。此の両親は大変新らし

自覚必要者

少しだけ算数をおぼえた子供が腕の食糍について、早速得意な顔をしていった。

「ぼくね、二つの鳩がね、三つになることを知っているよ」

机の上には焼かれた鳩が二つ並べられてあった。父がどうするのかと訊ねると

「これで一つ、これで二つ、この二つと前の一つで三つになるでしょ」

と答えた。そこで父は

「ではお母さんが初めの一つを食べて、お父さんが二つ目を食べるから、お前は三つ目を食べなさい」

といった。

これが子供の話だから二つが三つにも簡単になるだろう。しかしどんなことがあっても三つ目が食べられるわけがない。ところが大人の場合にはそうはいかない。しかも甚だ賢い学者は食べられる二つのものを自分の方にとって、食べられない三つ目のものを無産者に食べさせようと努める。

く、いつも子供達の話をよくきいては考える。子供のためにだけではなく、自分達の成長の爲でもあるらしい。今は子供達も成人して、それぞれ親元をはなれて独立して行く時、生涯の話相手として、いつまでも子供達の理解者であるべく、親自身の努力が伺える。

一方、結婚を間近かにして、人生の最も楽しい時である弟のフィアンセは、もじもじし乍ら口を開いた。

「でも、でも男と女と夫婦が二人で一つという訳にいかないかしら。」

みんなの口からはえましい笑いが起った。

彼女は頭がよく、さっぱりした近代的女性である。これから始めて他人同志であった二人が、一つの生活に向って出発しようとする際、此の兄の言葉はどうも気にかかつてならない様である。

「二人を一単位として考えてみたら……」
彼女がもう一度云い出すと又笑い声に包まれた。

母が静かな声で彼女に云った。

「やっぱり一つの生活をして、二人の人間は二人らしいわよ。一人の人間にはならないわね。」

此の母は多分、長い結婚生活を経て来た経験を思い浮べながら、夫も子供達も、一人の人間として自分から切り放し、そこから、新たなつながりを考え出そうとしているのかも知れない。

したがえて生きるのでもなく、頼り乍ら生きるのでもなく、一人一人が独立した成長へ向わねばならぬ事が、次第にこうした家庭の中へも芽生え始めて来ているようである。

ラジオから静かに音楽が流れていた。それは、サキソフオンとピアノとドラムが、それぞれの持つ音色を生かしながら一つの曲となって美しく調和していた。

× × ×

× × ×

時々金持とか権力者とか政治家とかいう人が一つ目を食べ、その人々に理論を与える学者たちが二つ目を食べるから庶民大衆はいつも三つ目を食べるがいいと教え込まれている。

善良な凡人はしかしそれを心から信じ、三つ目のたべられる日を楽しみ乍ら日夜黙々と働き続けている。あわれなことではないか。落ちついて、落ちついてといったくなる。

世はまさに科学時代、もう少しまともな社会を望むならば、為政者も一考を用する。

自覚過剰者は弱きもの庶民であり、その為にノイローゼなどという余けいな病にとりつかれる。自覚必要者は現代の権力者である政治家で、種々な放言で御満悦とはヒニクな事である。自覚必要者が過剰者に向って必要論を説いているのは、なおあわれである。

石川啄木^③

——法然へ還る道——

須藤隆仙



啄木の宗教理論

彼は宗教思想に理論性をもたせ、立派な一つの宗教論を作り上げているのである。これは明治三十八年（二十歳）に岩手日報に「閑天地」なる文を発表、その中で『靈ある者は靈に感應』すという一文を書いているが、その中に理論立てているものである。この「靈ある者は靈に感應す」は、東京におった友人綱島梁川が咯血した際、啄木がそれを夢に見たのを不思議に思つて執筆したもので、主に靈魂の問題を論じた次の如きものである。

「夫れ靈あるものは靈に感應す、我嘗て人生に第一我（物我、肉我）と第二我（神我、靈我、本来我）ある論を立して、靈肉の抱合もしくは分離争闘より来る人生諸有奇蹟を解釈し、一日姉崎博士と会して之を問ふ」

（余り長文となるので、この間要点丈を記すとすると博士は第一、第二というより意識下の我、意識上の我という方が妥当と答えた。自分もこれに同感である。人は木の如く。幹や枝は見えるから意識下の我で、第一我、肉我、物我、差別我である。

根は見えないから、これが靈である。その根、靈は地中にあるのである。地球は一つであるから、万木姿異なるも、根は皆地中であつて同一の生命である。地球に根ざした同一のものなのである。

これと同じに意識上の我も又深く宇宙の中心に根ざしているのである。神といい、仏といい、根本意志というのも、皆これをいうのである。故に人は姿、思想、性格等、皆異なるが、一度この「靈性の天地」に入ると、俄然として無我の境に達するのである」

「無我は畢竟超越也。解脱也。小我乃ち物我を没して大我乃ち神我に合一する也。遂に自己の死滅にあらず、あらゆる差別、時間、空間を遊離して、永遠無窮の宇宙大に發展する也。碧巖録に泥牛海に入つて消息なしと云ふもの、乃ちこの境の妙諦を教へて実に遺憾なし。ああ泥牛海に入つて消息なし。しかも其消息や宇宙に遍満せる也。既に宇宙に遍満す、万人の靈我、神明の懷に入つて何の差別なく距離なく、完たく無量無辺四劫に亘るの天寿を呼吸して合一す、故にその生命や共通也。故に互に交通し感孚し、応報す。茲に至

って人生の大音楽はその最高調に上り、思議すべからざるの神秘は明々たる白日の奇蹟として現はる。

究理の利剣もその刃脆くも地にこぼれ、科学の斧も其力を揮ふに由なく、ただ詩と信仰のみ最大の權威を以て天啓の如く世界を司配す

梁川は周知の通り啄木と同時代の人で、明治の思想家、倫理学者であり、美術評論、文芸評論、倫理研究などを発表、特に宗教に関する彼の思想は当時の青年層を強くひきつけたものである。啄木が「靈的感應」といっているのも、実は梁川の返事の一節の語で、啄木はいたくこれに感じた、とも記しているから、啄木自身も又梁川に魅了された一人だったようである。

しかし彼の宗教論は、ここで既に来るべき処へ来た。と思われるのである。

先述の如く、橋牛から始まり、法華経に影響され、姉崎の宗教論に耳を傾け、梁川の如き宗教的思想家と、実際に靈的感應を結んだと自信していた啄木は、橋牛の思想も、姉崎の理論も、梁川との靈的感應という實際経験

の上に具象化されていったことに於て、もはやこれらをひっくりかえした宗教思想は絶対のものであると自負したことであろうし、それはトントン拍子に、余りにもトントン拍子に実証されていった世界だったのである。哲学も科学も信仰の最大の權威の前には何の威力もない、とまで極論した彼は既にここに於て理論的には宗教の究極のところまで手を伸ばした彼だったのである。

しかし、このことは逆にいえば非常に危険なことがらでもあった。山の頂上に登れば、今度は下らなければならぬように、このことは返ってこの世界から引降ろす要因ともなったのである。

先にも述べた如く彼の宗教思想は、その中に強い自我意識が働いているのである。これは彼自身の性格でもあったらしく、ある評論家は彼を「強烈な意識家」と呼び、その作品も「ナルシズムの文学」と評しているが（福田恒存『近代人石川啄木』読本）あるいは文学に優れた立場をもつ人々は皆そのような意識家であり、宗教に於ける人間的立場も、畢竟強い自我意識無くして存在し得ぬものであ

るかも知れぬが、それはともかくとして、今彼一人について考える場合、とにかく強い自我意識に旺盛な進みを見せていったことは、彼と宗教との問題を論ずるのに見逃してはならない重要な点である、ということに注意しなければならない。

それはこれから論じようとする『法然へ還る道』という主題の最も大切な骨格ともなるものなのであるが、要するに宗教に対する彼の思想、又はその理論づけられたる宗教論、等は、宗教というものに対して、全く正反対の方向に向っているものだったのであり、いわば「宗教に背を向けたるもの」とでもいべきものだったのである。

なればこそ上述の一見すこぶる卓越したかの如く見える宗教論も、返って退転の、下り坂に向うものとなってしまうたのであり、このことは今少し実例を上げて展論してみよう。

自我と啄木

『イエスの所謂「神」と吾人の所謂「我」の本性とは、畢竟同一の解決にして、た彼

はこれを客觀的に視、吾人はこれを主觀的に索めたるのみ、人の靈的本能の叫ぶところを外にして何処にか所謂神の声なるものあらんや」

これは明治三十七年七月二十一日の日記の一節であるが、彼の宗教に対する、いわゆる退轉の、背向けの態度、乃至はその潜伏意識の、これ程明瞭に出たものはない、といつてよいであらう。

もともと彼は宗教というものに対して、無我的な謙虚な態度で臨んだのではなかったようである。「生の信仰希望は芸術の尊嚴を以て人類を精神的に救済しよう云うのだから、必ずしも常人の軌跡を追ふ必要はない」(37、3、10、小沢恒一氏宛書簡)この言葉が示す如く、宗教というものに臨む前に、既に一つの立場が築かれていたのであり、その立場とは強い自我意識そのもの、といつてよいであらう。

既に前の日記の如く自我の認識は、神と同一の立場にまで自信されていたのであり、自づから詩人として行動していた自負は、人類を精神的に救済しよう、ということまで絶

対化されておつたのである。

恐らくこの強烈な意識は歌人としての啄木を今日にあらしめた重要な要素だったのであるが、宗教というものに対する背向けや退轉は、この意識のためにもたらされていったのであり、そのことは、やがて宗教的權威より更に上位に自づからの權威を求めていくという、自我至上主義の明白なるものへと変容していったのである。

明治三十九年(二十一歳)には既に『バイブルを読み、法華經を読み、猶且つ真に動く能はざりし小生は、この「我の存在」の一意識に觸るるに當つて、俄然として醒めたるが如く候ひき」(同年一月十八日小笠原謙吉氏宛書簡)という言葉が出てくるのである。

そしてこの頃から当然の結果として、宗教的權威の否定、いい換えれば唯物論的宗教批判の言葉が語られるようになるのである。

「午後女教師上野さめ子女史が來た。熱心なクリスト教信者である。自分は、我等が神人クリストに就いて思ふうちで、クリストも亦人間であつたと思ふ程力と慰めを与へる事は

ない、と語つた。又黙禱によつて心を安めた実験や、この世の事々物々皆何事かの暗示象徴であると思ふ事なども語つた」(39、3、5日記)。「文明は矢張り人の作るもので、神のあづかり知らぬ所であらう」(39、3、8、同。これを「先の詩と信仰のみ最大の權威」といつた前年の閑天地の文と對比すると面白い)

「世間一切の事皆空である。あらゆる人のいのちなる希望も遂に空である、と斯く考へて來て、終りにただ一つ自分の存在だけは空でない、自己が空でなくなつた時、一切の世界はまた空でない充実の世界になる」(39、4、9、同)ここで彼の自我至上主義は、先の宗教論に見られる、自己を宇宙の分身と見ることから轉じて、逆に宇宙こそ自己によつて築かれていく、と見る自己から宇宙への道と變るのである。即ち先の宗教的權威は自我の權威の前に脆くも壊れ去るのであり、この翌年(二十二歳)になると

「天上天下独一の神なるものあることなし。神は所詮人の作る所、互ひに神を信ずといふ者にありても、汝の神必ずしも我が神に非ざ



洪民村小学校教員時代の下宿

かにかくに 洪民村は恋しかり

おもいで河山 おもいで川

る也(中略)茲に於てか吾人が太陽を指して以て宇宙間唯一の天日とすれども更に幾多の恒星の在る如く、真に万人に光被する神なるもの遂に得べからずして、神は畢竟個人の所有に帰す」(40、11、19、小樽日報「主筆江東江を送る」の一文)といった無神論が明瞭に打出されてくるのである。

尤も先の宗教論にしても決して単なるキリスト教的有神論でなかったことは資料の示す通りである。しかしあの頃は自我融合ということをいって、宗教的権威と自我の権威とを融合的に見、自づからが生命として活動する詩の世界も、宗教的権威の上に求めていったことは事実である。その結果は詩を信仰と見、「生の詩に於ける信仰は益々堅し」とい(37、4、15、小沢氏宛書簡)詩と信仰の権威を謳歌したのであったが、今はそうではない。自己の権威が優先されていたのである。文明は「矢張り」人の作るもの、という宗教的権威から分離された、人間の権威が登上してきたのである。

このことは反面彼の実生活上に於ける変転に起因することも勿論であろう。洪民の小学校に代用教員となり月給八円の苦しい生活のしかかってきたのは明治三十九年であり、以後益々貧乏の生活が開かれるのであるが、それは後にゆずり、今表面立てられた彼の宗教思想遍歴の上からのみいうならば、もともと宗教というものに対する彼の立場が充分に危機に立たされる要素を潜有していた、といえるのであり、一時の宗教論は、単に樗牛や姉崎に影響された、いわば借もので、彼の強い自我意識は、返ってこの借ものの宗教論のために野方図に猛走してしまった、ということになるのである。

私は先に十八、十九歳頃の彼を宗教思想的に「樗牛時代の彼」と呼んだのであるが、これと共に、二十、二十一歳の彼を「宗教より突放なされる彼」とでも呼びたいのである。

啄木の下り坂

『茲に汎神論あり、万有を網羅して無限の調和を覩じ、一切に神性を附与すれども、之亦無より有を見出したりとする一神論と同じ

く遂に有を有とするに過ぎず」

これはやはり明治四十年十一月十九日小樽日報に載せた「主筆江東氏を送る」の中の一節である。

先の彼の論旨は、一面キリスト教的唯一絶対の有神論を否定し、それは恰も仏教による無神論（諸法無我）の立つもののようにも受取られるが、しかし右の文が示す如く、彼は仏教の汎神論にさえ鋭い批判の目を向けていたのである。ここに仏教なる字は登場しないが、明らかに仏教の汎神論を問題としたものと看取されるのである。

尤も彼はこれ以後に於ける宗教への批判にしても、極力キリスト教を表面立て、仏教はなるべく伏せておいたようである。先にも述べた如く仏寺育ちの彼は、後々まで仏寺に対する強い憧れをもっていたのであって、「常光寺と申す禅院にまあり候、八十二歳なる老僧は乃ち我が伯父君にして」（40、8、8、宮崎大四郎氏宛書簡）という具合に仏門出身の縁由に心したのであるが、そのために仏教を直接の非難の対象にしなかったのではなからうか。私はそう思えてならないのである。

それどころか明治三十七年には

時の進みの起伏に

かの音沈む磐に似て

反れて千年をかへらざる

法の響を又更に

灰冷えわたる香盤の

前に珠数繰る比丘尼らが（以下略）

云云といった如き詩も作っているし（二月十六日夜として「落瓦の賦」と名付けられている。あこがれ所収）四十年にさえ公孫樹なる

一詩の中に

今日神無月末の日に

時雨の痛手ものとせず

一葉のこさぬ真稜の

姿よ、あはれ類ひなき

大梵涅槃寂靜の

仏心と忍ばれる（後略。40、11、7、作、

小樽のかたみ所収）

と仏心の広大さを讃えているくらいであるから、恐らく心の奥底には、偉大なる慈悲の

扉の御法語

ある時、聖覚房が上人に質ねました。

「只今は末法の世の中ですから、とても仏さまの申される道には逆くことが多くあります。聖道門の人たちにうそ、いつわりを心にもつ人があります。こう思うのは、私が念仏行者であるためでしょうか」

これに対して上人は、「末法の世の中、うそいつわりをいう聖道の人のあることは、その通りです。念仏の行者にも中味の無い、うそをいう人もあるかも知れないが、両者は根本的に違うのです」と末法の世の中においていかに念仏の行が優れているかを説かれました。説かれた仏道がいかに幽遠であり奥深いものであっても、末法の人にとっては、無理な教えか又は虚偽のことになり終るものです。しかるに念仏は道俗貴賤を選ばず、衆生の罪が重くとも一念すれば能く減します。弥陀の本願がそれだけ奥いのです。と上人が説かれ、それに続いて扉の御法語を示されています。

聖覚房は十六門記という上人の御伝を著された方です。その著の序文の内に、

宗教たる仏教の大きさに、心から傾倒するものをもっていたか、とさえ想像されるのである。

しからは、それなのに何故仏教さえも自分の依り処としなかったか、ということは、これからも述べ、これまでも述べてきたものを総合して頂かなければならぬのであるが、とにかく既成の宗教の形体に満足しなかったのは、何事にも新しさ、新しさ、のみを求めていった彼として当然のことだったのであろうし、橋牛・姉崎・梁川の如き思想家に受けた宗教観も、既述の如く、真に彼をして満足さすものではなく、返って自我の強烈に越脱させてしまったという結果をもたらすにあっては、自己の中からも、交人の外からも、益々、キリスト教は勿論、懐しい仏教とさえも手を切らねばならない必然的な羽目に落されていったものと、私は解釈するのである。

ここで少し筆順が狂うが、彼が宗教に関心をもち始めたのは、友人で伊藤圭一郎という人の影響が少なくない、という説があるのである。伊藤の父は伊藤圭介という当時の自由党の代議士であったが、伊藤自身も朝日新聞

の通信部長として名声のあった人であり、高等小学、盛岡中学を通じて啄木と同級生であり、ユニオン会の同人として密接な間柄の人である。岩手日報の顧問となり一昨年他界したが、その遺稿は近年（明治三四年五月）『人間啄木』として岩手日報社から出刊されている。

この人が啄木に宗教の目を開かせた、とは金田一京助博士の語るところであるが（『啄木とその時代』読本）先の如く宗教思想を織込んだ伊藤氏宛の書簡もあるから、この説は領かれることである。それに又、明治三十七年の三月九日の日記に「夜、上田寅次郎氏を大沢河原に訪ひ、談、文、宗教に涉り、興味つきず」と記しているから、当時としては彼自身相当宗教というものに関心をもっていたことであろう。

それが今このような形になって彼自身の上に見えてきているのである。若い啄木の思想の変遷の急なるのには誠に驚かされるのであるが、いよいよこの次には徹底したる無宗教、否、反宗教的人間に急転していく姿がクローズアップされてくるのである。（未完）

「一には聖道門、唯自力を上げまし、穢土にありて、仏道を成就す。此上は悪縁これ多故に、十進て九は退す。是故に此門を難行道と名。二には浄土門、仰て仏願を信じ、仏の名号を唱て、浄土に往生し、迷に菩提を証。彼國は善縁これ多故に、進のみありて退なし。是故に此門を易行道と名。中略「歎喜身に余り、感涙忍難し。抑此事は誰人の恩徳ぞや。偏にこれ先師上人の慈訓の化益なり。報じても猶予あり。謝しても亦飽ざる者なり」とあります。

聖道の行法は一進一退のものです。進歩のときはよいのですが、退歩のときは誰でも人としてのうそ偽りや空虚さが生じるようになります。聖道門の虚偽は自然に生ずるものであり、いうならば内蔵されたものでありましょう。それに比較して、念仏の行者は仏願を信じるところに出発するのであって、肉体的な精進にたよるところが少ないのですから、間違ひはありません。多少の虚偽があったにしても、廻り合せの时期的なもの又は社会的な意味あいからのものですから根本から離れた問題とみることでできます。



近代高僧伝

日野 靈瑞 伝

四囲山にとざされた長野盆地の一隅、信州更級郡希施高田村に、靈瑞が孤々の産声をあげたのは、文政元年八月十日のことであつた。父は松代真田藩の郷士丸山正信で、朝に夕べに善光寺の鐘声に耳を傾け、信心深い父母の慈しみのなかに育てられたが、七歳のとき南原蓮香寺齊誉仁説の室に入って剃髪し、名を順説と改めた。彼がその名順説を捨てて靈瑞と名乗ったのは、更にこれより後増上寺に掛錫し、学寮主光誉慈専の門を叩き宗乗を究めてよりのちのことであつた。

弘化二年八月増上寺学寮主となり、文久二年には進んで学頭職に補せられ、此の年十一月生実檀林大巖寺の貫主になったが、居ること十一年にして明治五年新田大光院に董住、十九年三月には増上寺第七十一世の法燈をつぐことになった。これより先き明治十一年三月時の内務郷大久保利通により、浄土宗は地を東西兩部に分ち、各々に取締りを置いて管理すべきことを布達されたに कांगみ、宗門を二分し、東部管長に石井大宣、西部管長に養鶴徹定が就任することになった。ここに於て東部は増上寺に、西部は知恩院により宗門を形成することになったが、この東西分裂の萌芽は実にも同八年にまでさかのぼることができようである。

増上寺は三百年の久しきにわたって付法伝燈権を掌握しているとはいふものの、知恩院の末寺にしかすぎない。所謂本山と呼称し得られるものは、六都三ヶ山のみであつて増上寺は本山ではない。ここに増上寺は知恩院及び黒谷金戒光明寺・百万遍知恩寺・清浄華院に付法伝燈の全権をゆだねることにより、知恩院末寺の名を脱し、本山号を名のることが出来、兩者対等の地位をきづく事になったのであり、時に明治八年のことであつた。しかるに同十七年八月一宗一管長制をとるべき旨、太政官より布達してきたため、知増兩山管長の何れが首位を占めるかによつて、政争が惹き起され、事態は収拾つかぬままに二十年三月まで対立をつづけ、挙句の果ては五ヶ本山法主は辞職して其の席をしりぞき、同年九月漸く宗憲の制定を見て、さしもの内紛も一応落着いたのである。ここで本山法主の選出が新たに行われ、知恩院には行誠上人が出られ、靈瑞は再度増上寺に董住することになった。

しかるに行誠の在山は僅かに一ヶ年。行誠の先住は順誉徹定。従つて徹定ののこされた

四十万円にもなる負債は霊瑞によって引きつがれることになったのである。知恩院は堂宇の軒傾き、壁くずれ、大師前の日々の御供養さへ事欠く有様で、朝食が終ると昼の御飯を考えねばならない。八百屋も豆腐屋でさえも、現金でなければ売ってはいけない。御本尊に供える御仏飯も買ってお金がなくて、此の悲境を聞いた山内に修学していた生徒たちが小遣いを節約して御仏飯費を献ずるということとさえあり、金融のために信源講という講をつくりましたが、思わしくはなかった。このような苦境の中に在住されたのが霊瑞であつた、彼には祖山復興のほか何もなかった。

もつて如何に其の苦難な生活のうちに過されたかが察し得られるであろう。しかも霊瑞の在住は二十一年五月より二十九年五月まで、実に八ヶ年の長きに及んだ。その間二十二年には負債のために債権者四十余人によって訴訟がおこされ、遂に華頂山公売の議が起り、又名古屋の紅葉屋から七万五千円を借りたが、期限までに支払うことができず、ために紅葉屋は執達吏を送り、山門に競売の張紙をしたというのも此頃のことであつたらうか。

時に阪根弥兵衛翁は、山門にたたずみ「此の山門は昔法然上人が念仏を弘めて下さった霊跡の入口である。今この殿堂も山門も全国の信者篤信者達が汗と油で築きあげられた大切なものである。今それが競売になることは、法然上人に対して申し訳がない」と静かに熱い涙を流されたという。

このような成行きの中で、彼は二十三年九月門末臨時会を召集して善後策を議せしめ、同会が門主親しく巡教して特志を勧誘すべきことを議するや、爾来五星霜にわたり、七旬の老軀を提げ、祖廟復興のために諸国を親化し、信徒に結縁し、浄財を集めるのに苦心なされ、又二十四年には「総本山知恩院整理債券」を五十円券と百円券とに分ち三万円発行し、次いで二十七年にも借換のため二万五千円発行されたが、債券には

「納当山負債整理ノ為メ、縑素ノ協賛ヲ得テ爰ニ債券ヲ発行セシム」と記されてあつた。かくて師の親教の浄財の全ては償還整理のためにつかわれたのであつて、其の勸財の旅たるや、交通至難の當時にあつては容易なものではなかつた。悲境と

苦惱の中に同二十九年五月伊勢路にと旅路を求められたが、その勸財親化の途すがら、十三日には河口西称寺で日清戦死病者追悼大法会に臨み、更に授戒会を厳修したが、終つて微恙あり、師は往生の近きにあるを察し、側近に臨終行儀を整うべきことを命じ、同日午後従容として示寂せられた。

時に世寿七十九、表葬は勸財親化中の故をもつて、慣例を破り、知恩院御影堂で行われ、生前の功を嘉せられたという。法名は

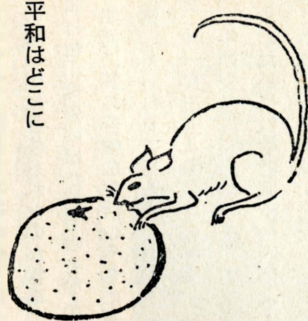
麟蓮社鳳鶯上人龜阿眠龍霊瑞大和尚。

誠にもつて師は後半世を知恩院復興のために身命を捧げられた大法匠であつて、今日莊嚴を持するに至つたのも一に師の捨身尽瘁の賜ものである。

(大橋 俊雄)

素人平和論の罪

木谷 昭



平和はどこに

陶器を商いに行っている人があった。或る日茶碗とか壺といった商売の品物を沢山積んで大川の渡場にさしかかった。ところが余り荷物がたくさんなので船頭はなかなか返事をしなかった。

「たのむ渡してくれ、今日中に向うへつかぬと駄目なのだから」
「いやいやとても駄目です。そんなにたくさん荷物を渡していた日には一日かかってしまいますからね」
話は容易に解決しなかった。ふと商人は

先程拾った美しい石のあることを思い出した。勿論高い渡し賃を出すのはつまらぬと考えていた矢先でもあったので、その石を出して、

「これはとてもよい石だが受取ってくれないかね」

といった。その石がそれ程たいしたものかどうかは商人自身も知らなかった。

船頭はしばらくその石を眺めていたが、まことに美しいので喜んで承知した。商人は無事に渡しを越して思う方へ消えていった。

船頭は何度もその石を見て喜び、やがて値ぶみをして見たが二十両とは下らぬ程いいものだと思う、たいした思いもかけぬも

うけが転り込んだものと喜んで船の隅におくことにした。

そうして幾日となく行き来の客を渡している間にふと宝石専門の商人が乗り込みこの石に目をやった。どうみても名石のようにみえるので手にとってじっとみているとますますもって立派な石であるということを見つけた。そこで二百両で売ってくれと船頭にいうと船頭は二十両ぐらいのものがしろうと思っていたものが十倍の二百両などといわれて文句なく無条件でOKと即座に売ることになった。石はそこで宝石商の所有するものになった。

商人は家に帰り丹念に磨きをかけた。すると始め見込んだ通りに世にも珍らしい青玉の宝石となった。このことがだんだん世の中に言い伝えられ噂となって拡がっていった。

丁度その頃国の王妃が頻りと世にも稀な宝石を捜し求めておられた。だからやがてその噂が耳に入ったのだから問題はない。どんなにたくさんのお金を払っても構わないからということになって早速使を遣わしその旨を伝えられた。

侍臣は商人の店を訪ねその価の幾らであるかを確めた商人は二万両ならおわけしてもよいと答えた。

勿論商人は二百両が百倍の二万両になるのであるから無論それで充分満足していた使いの者は即座にいわれるままの金額を並べた。

商人は宝石の納っている蔵にゆき幾重にも包んである箱を開けようとする中でささやかな響が聞えて世にも稀な宝石は自らこつば微塵に砕けてしまっていたのである。驚いて目を見張っている商人の耳に宝石は遺憾の意をこめて、

「自分は始め陶器屋に拾われて渡し賃の代用に使われた。受取った船頭は二十両と値ぶみした。どれだけ安く見積られても自分は腹をたてない。何れも素人だから。又汝が二百両に買取ったこともそれでよい。商略であるから。さて専門の玄人であり、自分の真価を認めてくれねばならぬ汝がわずか二万両ばかりに評価して再び素人の手に渡すということになれば自分は心外にたえぬ。永久に真価が認められぬのなら

自滅して恥を後に残さないのがましだ。告別さようなら」

自らの真価を認められなかった宝石の言分はこうしたものであつた。

ところがわが国の文化は勿論のこと歴史自体がその真価もなく路傍の石のように転々と多くの人手に渡り歩こうとしている。

近くは軍国主義者の手に落されて勝手に評価された。ここでは船の渡し賃くらいに使われた。

尚武の国柄として教えられたのは全く真価よりすれば渡し賃以上のものではなかった。

次で国粹主義者及び過度国家主義者の手に移っていくらか見直されはしたが、しかしこれも真価にふれ、魂の本質を究明して全人類の平和と幸福のために使おうとした玄人たちではなかった。ただ偶然のはずみでその平和という宝石を手にしたまでのことであるが、その平和がどういうものか、どうして真価を発揮するか、如何にして守るべきかについては全くの素人であり、だからむしろ傷つけはしても決して正しい取扱ひ方を知らなかった。素人という点で平

和という宝石も自らの尊さを自碎するほどではなかったが、しかし時局は百八十度の転換をして敗戦という契機により、ここに始めて平和の真価が改めて見直され、発揮されなくてはならぬ状態に追い込まれてしまった。

自由と人権と暴力否定と平和、この崇高が人間窮極最高の内容をもつ。宝石が新しい時代の脚光をあびて浮び上つて来た。ところがこの宝石の外殻にとらわれたりその真価に向つて人間としてあるべき態度に出ないならば、その宝石は自ら恥を千歳に残すといつて、ささやかな音と共に自滅してしまふことであらう。

今日のわが国の情勢はまことに危機をはらみ、その真価を再び素人の手に安く売ろうとしている。軍備は漸増の形をとり、逆コースは益々その力を増している。

宝石の真隨にふれたのは、わずか二、三年でしかなかったのである。あまりにもはかない一時の夢であつた。しかしわれわれは二度と再びその宝石の真価を安売りしたくはない。尊い生命の宝石をそう易々と捨ててたまるものではない。

誤謬の真理

親爺は息子にかくして留守の間に思う存分と酒を飲んだ。

一方息子は親爺にわからないように外でたらふく飲んで帰って来た。

息子が帰って来たのをみると親爺はすっかり酔ってしまった眼を大きく開いていた。

「お前のように頭の五つも六つもあるような奴にはこの家はどうしても渡すことは出来ないぞ」と怒鳴った。

一方息子は朦朧たる眼をこれ又大きく見開いて、上下左右を何度も何度も見廻しながら、

「こんなぐるぐる廻るようなつまらぬ家など、どうして欲しいものか。たのんでも欲しくない。」

といって答えた。

話は全くうまく合った。

それは当り前のことであろう。酔っているものには酔っているものだけの世界がある

り一致がある。

よく酒場などでこうした状況をわれわれ

はしばしばみることであろう。

しかし一致があり、統一があるといってもそこに本当の実在があるというわけにはいかない。そんなことは決してあるわけがない。

真理が真理の統一をもっているように、誤謬も又誤謬としての統一をもっている。

自己満足している人々が誇りとしているもの、それに陶醉して共鳴している酔人たちの理論が勿論正しいものとは云い切れない。

金に酔い、名誉に酔い、権力に溺れているものの目にはそれ相当の多くの統一の系統とがあるだろう。

しかし家が廻ったり、頭が五つも六つもあつたりするものの統一とどれだけの区別があると云いようか。

統一のあるかないかを考える前に先ず自分の眼が酔っているか、いないか反省してみなくてはならない。

自己陶醉のものには応々にして反省と批判が欠如する。

自分こそは正しいと思い込み、あの人のいうことこそ本当だと単なる直観的感情で割切つて盲目的に信仰し、追従してゆくことは酔人たちの行動とさ程変わったものではなく、むしろ同じでさえある。

徒らに酔つて健全な判断の意識を失い、すべてを不幸にする愚かさは止めたい。

世界平和にしてもどちらが正しいのか、共に酔っているので、酔った上の平和論は一致しても、実際の世界の实体は一向に明るい面をみせてくれない。いい加減に互に自分の眼をたしかめてみるがよい。やれ科学だ、いや科学だけでは平和は得られるものではないと言争っているが、それを証明してくれるのは歴史だ。歴史は今それをひそかに心から欲しているのだ。

× × × × ×

× × × × ×

ある人が、ある上人にこんな質問を發した。

「私は非常に怒りやすい性質で自分が悪いと知っていながら妻などに向つてツイかあゝとなつて荒い言葉や仕打ちに出てしまいます。ために家の中はいつも暗いのです。仏教の教えによつて、こうした私を何とかなおして頂けないでしょうか」

上人がむずかしい仏教の教理でも教えてくれるかと思つていた人は、次のような何でもない言葉を聞いたのである。

「それはお前さん、何でもないよ。これからお前さんは誰と話をする時でも、口を切る前に胸の中で、一つ二つ三つ——と三つだけ数を勘定しなさい」

「それだけですか」

その人は、すぐ不満そうな顔で云つた。

「それ、それだ。今、お前さんは三つ勘定してから物を云つたかね」

「アッ、忘れました」

「ほらまた忘れてゐる。一つ二つ三つと」

「——」

その人は、三度目に一つ二つ三つと胸で勘定をした。

「——なるほど、よく判りました」

「判つたろう」

「——はい」

小さなシツケ



「じゃあ、またおいで」

——「おじゃましました」

その人は自宅に歸つた。

すると奥さんが待ちかまえていて、いきなりわめいた。

「あなた、賢坊か鉄瓶をひっくり返してヤケドをして」

「ナニ」だからお前は不注意な女だと云

うんだ、と怒鳴ろうとして、その人は今の言葉を思い出した。云いたいのを耐えて、胸で一つ二つ三つと勘定した。数え終つてその人は奥さんを罵ろうとしたが、

「——でヤケドはひどかったかい」

「イイエ、お医者さまに連れていったら、十日もすれば皮が張ると云ふことでした」

「それは良かった」

その人は思つた。もしあの時、一つ二つ三つと数えなかったら、あそこで奥さんとパチパチ

戦いが始まり、ヤケドの具合を

たしかめる間もなく罵り合つてしまつたらう。さんざん罵つたあげく、ヤケドがたいしたこともないのを知り、「早くそれを云やがりやあ俺はこんなに、怒鳴らなかつたんだ」などと不愉快な仲直りをするのが落ちだつたらうと。その人は上人の言葉を忠実に守つた。家の中が明るくなつたばかりではくなの商売上でもずいぶんと得をした。

兼実公の信仰 (一)

月輪殿の巻

浄土宗祖円光大師法然上人の御念仏は、先づ京都と云う文化のすぐれた畑に、美々しく咲いた信仰の花であり実であった。

緑りの東山連峯、悠久たる鴨川の水、浄土宗八百余年の歴史を語っている。柳桜を織りまぜてと歌われ雅趣にとんだ美しい街である。住む人は幾変迂、浮世と無常を示したけれども山川はそのままである。

北から南にかけて中央に上京区・中京区・下京区とあり、北に向って左手には右京区・嵯峨、西山粟生などが在る。右手は左京区・東山区・伏見区となっている。

上人の教化は東山区・左京区・右京区と

すすみ伏見区に及んでいる。

東山連峯の南端に稲荷山がある。伏見の稲荷さんで有名な所である。

稲荷山の北側一帯の地が月輪と云われ、当時藤原兼実公の私有地であった。公はこの地に山莊を営まれ、山莊が閑寂であり四季の変化にとんでいたで、大麥お気に召して多くここに住まれるようになった、世に月輪殿と呼ばれ尊敬されたのである。

二

法然上人四十八巻伝には、月輪殿或は九条殿と呼ばれている。九条殿とは月輪山莊以前のおすまいが九条にあったので、そう呼ばれた。上人伝は浄土宗全書十七巻目には九種収録されているが、どの伝記にも月輪禪閣の名の見えないものはない、その閑係は全く公の暖かい帰依信仰に始終してい

る。

兼実公は当時日本の最高權威の後白河法皇のよき助言者であり協力者であった。夙に摂政となり関白となり、氏の長者として藤原一門をおさめ傍ら南都北嶺の大教団に対しても権力を持ち尚勃興の源頼朝の信任も厚いお方であったのである。

上人と公との関係が深く親しいものであったればこそ、四十八伝の中に十八カ所も見えている訳であった。

三

さて月輪山莊は、月輪のどの辺にあったろうかと云うことは古来問題であった。

承元元年（一二〇七A・D）四月五日公

の薨去後は、山莊廃亡幾百星霜、その所在地を確認することは難中の難事であったのである。明治十二、三年頃から仏教復興の波にのって、熱心な浄土教関係の諸先生方によって、いく度か調査研究されてはいたが、この地がそうであるとは仲々決定されなかった。明治十四、五年頃になってやや定説を見るようになり、公の墓所も明瞭に

なったのである。その第一の史料は、公に
ついで関白となった峯殿こと光明峯寺藤原
道家公と唐僧聖一國師（円爾）とが建立し
た京都五山の第四位恵日山東福寺境内四至
のうち

東月輪殿堀路通り

とあることによって、東福寺東方にそって
山莊があつたことが判つたのである。

東福寺は嘉禎二年四月の創建であるか
ら、兼実公薨去二十九年後に當っている。
東福寺四至の記されたのは弘安三年であ
る。東福寺建立後五十四年目に當ってい
る。勿論東福寺が建立された時すでに境内
はきめられていたのであつたろうが、記録
として残るものは弘安三年である。

明治十七年五月、浄土宗では公の墓前に
二基の石灯籠を捧げ、御廟を修葺し、一は
公に深い至誠を捧げ、一は上人伝道の靈地
二十五靈場第十八番であることを顕勝した
のであつた。

四

上人と兼実公とが記録上に於ける初見

は、公の日記である玉葉の文治五年八月一
日のことであつた。その時上人は五十七才
であり、公は四十才であつたのである。

公は始めて上人を請じ

「法文と徒生」

について法談された。公は大変感銘せら
れ、同月八日に受戒と念仏をしている。そ
れからは毎月の行事となり以来十八カ年間
に至つて、公が承元元年薨去までつづいて
いたのであつた。

この間ますます公の信仰と帰依は深いも
のがある。例えば、公が月輪山莊を造られ
た時に、舜昌の言葉を借りるなれば、

例もなき屋を、一字指図を下されて立て
させられけり云云

と伝えている。当時貴族達は各自に山莊を
営むことが慣例であつた、それには一定の
規格があつたのである。ところが、公自身
の指図で、他の山莊にもない一字を作られ
たのである。さあ大変である、珍らしいこ

とよとばかり、はやし立てられた。ところ
が、それは、

はや上人の御休みどころなりけり、老^{ちやう}者
にておはしませば、まづここにて休めた
てまつりて、のち対面あらん為にてぞあ
りける。

と云う訳であつた。

始終おいでになるので無かつたならば、
御休憩所の必要がない筈である。公の熱い
信仰と帰依がなければ、それまで配意され
るわけがない、特に公自ら指図されたと云
うことは、余程の厚意が無ければ出来るも
のではない、そこに至純熱烈な信仰を見る
ことが出来る。

（村上 博了）

× × × × × × ×

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

不治の病の夫と三人の子供をかかえて生きて行くには？

——おたずね——

この頃、信仰に希望を失っております。私の主人は十年前から神仏を拜んでおりましたが、病氣になりました。小倉国立病院の先生のお話では「がん」といわれました。日頃からおとなしい、こすい人でした。

十五年も神仏にお祈りして、このような不幸な思いを致します、私のような不幸な者はほかにおりません。信仰に対して、心細く、将来に希望を失いました。

みんな、私達の運命として諦めなければいけないでしょう。病院には今年一杯いられます。市役所に十六年おりましたの

で、今年で三年入院させていただきます。入院代も市役所から出していただきます。給料も半分だけ二年いただきました。

今年の二月からはもういただけませんので、貯金を五万円程会計に預け出していたいてたべて行き、あとは更生会のお金を貸していただいて、今年中たべて行かなければなりません。退職金は二十五万円程です。

病院の先生のお話では、主人の病氣は治らないと申されます。これから先どうしたらよいでしょう。私は今、市場で働いて六千円もらっております。病氣の主人をかかえて、退職金を使ってしまったら、どうして生きて行けばよいのでしょうか。三月からお役所の給料はなくなります。今年一杯は退職しなかったら入院代は役所が出して下さいます。これから先私は生きて行けるでしょうか。

門司の平山観音院の御院家さん達から、病氣を治してやるといって、お金を五万円程取られました。品物も喰べ物も沢山取られました。私は御院家さんに取られたお金や品物のことを思うと夜もねられません。どうしたら私はこのうちから助かることが出来ましょうか。観音様はお金を取ったばかりで、私達を助けて下さいませんでした。お寺のさぎにかかったのも皆私達の罪からでしょうか。

役所の方は、来年の二月までに病氣が治れば、主人はまた役所にいられます。退職しない方がよいでしょうか。病院の先生は病氣は治らないと申されます。私は子供が中一年の女子と四年の男子と一年の女子と三人おります。これからの生活はどのようにな致しますたらよいでしょうか。

来年から退院した主人をどのようにして行ったらよいでしょうか。頭が少し悪いので、仕事が出来ないと思います。すみませんが、少しでも早くお返事がいただきたいと存じます。私達の助かる道をお知らせ下

さいませ。(本人の希望により匿名、門司市病夫をかかえた一主婦)

信仰はお金や物と引きかえにするものではない ません

——お答え——

お子さん三人をかかえて、不治の病いの御主人を背負っては本当に大変なこと、深く御同情申します。御出問を読んでみるとあなたの気持ちがあるまま文字になっているようです。御主人の病気のことは、不治の病いとして諦めなければなりません。浄土宗の諷誦文にも「重病まったく老いを待つことなし」と書いてあります。無論、最後まで治療と養生に努力しなければなりません、心がまえだけはちゃんとしておいて下さい。

人が病気になるのも仏教という因縁ですから、やむを得ません。ただ、その因縁も本人の努力と家人の同情とで、よい方向に

むけることは出来ます。それは絶対に病氣や貧困に負けないぞという精神力と、病氣そのものに対してはあくまでお医者さんの指示に従って科学的治療をすることです。精神力と科学力をうまく一致させて行けば、たとえ病氣はなおらずとも、精神的に安穩な落ちついた生活をする事が出来ます。

精神力を強くするには、信仰が一番大切です。人間の力というものは、一人丈の力は弱いものです。しかし、その背後に「仏様」の大きな力がひかえているならば、何ものもおそれる必要のない程強くなります。信仰とはひとにたのんずるものではなく、自分がみほとけの前に手を合せ、無心の心持が「南無阿弥陀仏」をくりかえすのです。仏様はお金や物と引きかえに御利益を下さるようなことはしません。信仰する本人の真心こそが仏様のお心に通ずるのみです。

あなたは、観音院の坊さんにお金や物をまき上げられたれとくやしがつておいでです

が。まき上げる方もどうかと思いますが、まき上げられたあなたも、信仰ということについてまだ本当のことを知らなかったのです。信仰はお金や物と引きかえにするものではないということをよく心に刻んで下さい。

お金や物を上げた時、病氣をなおしてやると本当にいわれたのでしたら、お医者さんの診断書を持って行って、その坊さんによく話をしてみてはいかが。良心のある人ならきつと返えして下れるでしょう。

それにしても、子供さん方もそれぞれ学校へ行っているのですから、もうしばらくの辛棒です。そうして、あなたが苦心して大きく上げてあげれば、子供さん方もきっと大きくなってその恩をかえして下れるでしょう。それを楽しみに、生活保護なり、更生保護をうけて我張って下さい。御主人の退職金の使い方などは、役所の方や信用の出来る人とよく相談して、最善の方法をとられるように願います。

花まつり・その他



中村 康 隆

○ 仏教がこの国に栄えることの出来た最も大きな理由の一つは、それが早くから民衆の習俗のなかにとけこみ、民衆の血と肉となることが出来たからに外ならない。そして仏教がこのように日本民族の歳時習俗化し得たのは、結局それが同じアジアの民族のなかに生まれ、そして伝わつて来たからで、つまり仏教の行事と日本民族の習俗とは、共通の要素が多く同化融合し易かったからだということが出来るようである。

殊に昔は、いづれも陰暦を用いていたので、月のみちかけによって日を数えるところから自然と新月・半月・満月の四日が特に大切な区切りとされ、その日に祭りごとをする風がいずれの国でもみられたものである。従つてこれらの国に仏教が成長し流伝しても、仏教の行事日とそれらの国の固有の祭り日とは元来合致し易かったわけで、自然また両者の融合も容易であつたろうという訳である。もっとも今日では太陽暦に変わったために、祭事の日取りも新旧月遅れなどまちまちとなり、したがってまた季節感のずれも生じたことはいなめない。

○ 四月八日の釈尊降誕会として花に不自由のない旧暦の頃と

違つて、私なども子供の頃花御堂を葺く花集めには苦勞した覚えがある。境内や裏庭ばかりか遠く野末まで採しにいつて飾つたものである。「すみれ、たんぽぽ、れんげ草、花の御屋根が美しい」との歌は、私たちには何かびつたりするのだが、昔は藤、うつぎ、つつじ、石楠花等が家々で用いられた。といつて家々に花御堂をしつらえたわけではなく、そこに古い花まつりの姿が見出せるようである。例えば越後刈羽郡の村々では「藤の花立て」といって、七日に物忌みをし翌朝晴着して山に行き藤の花房をとつて来て仏壇に供える風があつた。上州高崎地方にも七日の夕方から軒に藤の葉をさしたし、水戸でもうつぎの枝をさしたという。孝経倭漫筆によると「江戸四月八日に卯花を門戸に挿む云々」とあるから、卯月にちなんであつた用いるところが多かったのである。木曾の村々では家の戸口に山躑躅を打ちつけたということで、伊那谷ではそれをあとで苗代に立てるという。

降誕会を花まつりと呼ぶのは半世紀程前からのことに過ぎないらしいが、もともとそう呼ばれるにふさわしい素地はあつたわけである。播州ではこの日をハナともいい、前の晩に白と蓬と二色の団子をこしらえて釈尊に供え、八日にはうつぎ・べにつつじ・石楠花・密などを束にして長い

竹の先につけて庭先に立て、これを高花といいお釈迦様にあげるのだという。九日にはこれをおろし雨のかからぬ所にしまつておき、雷鳴の日に火にくべると落雷の危険がすくないともいう。和泉地方ではこれをたて花、京阪から中国四国にかけては天道花またはテント花というが、大和高市郡などでは八日花といつてゐる。紀州の有田郡では夏花と呼んで、天道花のほかに、家の人数だけ竹の花筒を立てて卯の花をさしておくところがあるという。やはりお釈迦様に供えるといい、七月十三日まで毎日新しい花とかえたということである。

この夏花の行事は禁中にもあつて後水尾院年中行事四月十六日の条には「けふより黒戸にて夏花を摘ませらる」とあり、伊勢と内侍所へは三葉づつ、他の大社は二葉づつ、諸仏七葉、御先祖七葉などと記されている。社寺等ではこの花摘は多くは四月八日であつて、日次記事によると、東寺などの花摘は花御堂を作つて誕生仏を安置することであり、比叡の戒壇院の仏生会には女人も登拝の禁を許され、序に東阪本栗阪の上の花摘社に詣でるとあるし、山形県庄内の大泉一条八幡宮の祭礼日記にも長享十三年頃四月八日「花ツミ」の祭があり、前日はカイホカイがあつたという。熱田神宮には「花の撓」という行事があり、もと

は花の塔で灌仏した名残りが転じて米棉作の作り物を飾る豊年祭になったらしいという。諏訪でも花会はなえの式が社僧参加の下に行われたし、その他四月八日を祭日とする神社も多く、都下の御嶽神社、秩父三峯神社、群馬榛名神社、青森岩木山、出羽月山、熊野本宮及び那智山、越中立山権現など、所謂靈山信仰と結ぶ、修験や両部関係の社に殊に多く見出される。岩木山神社では花まつりと呼んでいる。それでこの日を以て修験の春山入りの日、トアケ戸開けと結びつきのあることの指摘もされている。

この日を山登り、遊山の日とし、または山の神の祭日としたり観音や薬師詣りの日とする例も多い。奥州にはシガ

ヨウカといって遊び日として粟入りの強飯を作り附近の観音薬師等に参詣するというし、駿河庵原郡の一部では朝八日といって山の神を祭るというが、清水港附近では今もその頃山ゆきゆきといって仕事を休んで連立って遊山した名残が見出される。阿波の剣山の麓の村々では山いさみいさみとい

って高い処に登って海の方を見る習わしがあり、摂津豊能郡では山仕事の片付いたことをヨウカビしたというのは、こ

の日までに山伐りをすませ、この日は野崎詣りに団子を作って嫁聲にもたせて里帰りさせる風があったのである。鹿児島鹿児島の飫島ではあめがた節句あめがたふしぐうといって飴を食べるが、下飫

島の手打では寺に詣らず講中で山登りして一日を飲食の興におくった。磐城には神の日といって田に入ることを忌む地方もある。遊び日の風もこうした禁忌習俗も元来の神祭りの祭日から来ているのであらう。関東北部にはテントウ念仏とか天念仏と呼ぶ行事もあって、大体高い山に部落の人が集って登り念仏を唱えて太鼓をたたいておみきあげする風があった。天道花のテントウも同じことで、或は農作のため天日の恵みを祈った心持の現れかとも考えさせられる。喜界島ではソーリとかショイとかよんで半日休業し麦飯をたべた。この名はサオリつまりサの神（田の神）の降臨を意味するという。

そういえば、この日甘茶で墨をすって紙きれに「千早ふる卯月八日は吉日よ神さけ蟲を成敗ぞする」と書いて台所の戸棚などに逆ささかにはったものだが、この歌も農作の蟲除けのまじない歌から出たものといえそうである。

こうして古い花まつりの姿の中には何か農耕の民がこれらの幸を祈った素朴な姿がにじんでいるようである。出羽三山など田植まつりとしている所さえある。

しかし一方にはお釈迦さまや仏壇に花を供え寺詣りしたりする仏事のいとなみも前に見た通りである。熊本の下益城地方の人々も釈迦院へ登って黒ブチの枝や桜の花など

折って来て仏に飾るといふ。播磨地方にも山上の寺へ近隣の村々からその一年間に死者を出した家の者がお詣りに上

って賽の河原に櫓をおいてきたり、池などで経木流し（戒名を記した経木に水をかける）をしたりしたという。赤城

の山麓の村人たちも同様赤城山に登って死人にあいに行くという。山上の小沼のほとりで虚空蔵尊に詣るとも地藏ガ

嶽に石を一つ積み上げてくるともいい、賽の河原という部落では当番で神社に詣ったり赤飯を白木の重箱に入れて小

沼に投げこむという。彼岸や盆の行事の一部と類似の習わしであるが、この外この日が盆などとならぶ重要な墓詣り

日となっている地方も多い。京都府園部町近傍ではこの日を花折りといって新仏のある家で墓に詣るし、兵庫氷上郡

では他家に縁付いた子女が新仏の実家の墓詣りに来るのを花折り始めというそうだが、同様な墓詣り風景は香川県で

も一帯に見られるという。中世の文献にこの日山に登って花を摘み亡霊に供養することがあると、高花その

他一連の供花の意も亡霊供養にあつたろうとも受けとられる。氷上郡でも高花の竿の根本に棚を造り火鉢をおいてシ

キミで水をかけ「お水を供えます」という所もあり、多紀郡の一部でも同様な習わしがあるが、特に新仏の家では卯

月年忌といつて親戚が団子やおはぎをこしらえて来て高花

の下で傍のシキミやツツジを折って供えるということ、全く盆棚と類似の風習も眺められる。

○

もともと、日本では灌仏と盆とは並んでまづ先に公けの

儀式として取り上げられたのであつて、推古朝十四年の記事に「是の年より初めて寺毎に四月八日、七月十五日に設

齋さいす」と見えてゐる。その後これが恒式とされたことは延喜式などによつても伺える通りであるが、こうした灌仏

（花祭り）と盆会との同時採用には実は一貫した意味があつたらしい。それは天武、持統両朝の紀に此の両会の月に

広瀬竜田両神を祭るのが例となつてゐることを見出すからで、つまりは稲作の豊かな成長と実りとを水神風神を祭つ

て祈つたのと揆を一つにするものがあつたと思われるのである。もともと田の神・山の神・祖先の霊・新亡の霊を祭

つて稲作の順調な生育と成熟とを祈つた習わしと結びついて、灌仏と盆の二つの祭りがとりあげられたらうというの

である。花祭りの甘茶供養の風なども農耕祭りと結びつき易い因子をなすといえよう。柳田翁などは先祖の話の中

で、田の神も山の神もともとと祖霊と同一視される所以を説いておられる。そこに盆や彼岸と似た仏事供養の行われ

るゆえんも存する訳である。

もち論、寺々で行われた本来の花まつり、灌仏会も民衆の楽しい祭りであつたことはいうまでもない。当日はまだ暗いうちから花御堂を飾り甘茶を供養した。子供たちは手に手に瓶などを持って来て、誕生仏に甘茶をそそぎ、自分も飲み、そして瓶につめて持って帰り、仏壇に供えたり、それで墨をすって手習いすると上手になるといつて前にあげたまじない歌を書いたりしたものである。そしてこうした特別な祭日に墓詣りしたり先祖供養をすることも私たちには当然のことのようであつた。暮にも正月にも節分にもその他節日節日に寺や墓に詣る習わしは、今も地方には決して珍らしくない。上代農耕の民がこの機会に稲作の順調な生育を願つたのもまた当然の歩みであつたろう。

○

仏教の行事は決して庶民の生活と無関係ではあり得なかつた。むしろこのような習合の上にお釈迦さまの誕生が祝われたことは、これからの花まつりの進め方に対して何か指示するものがあると思われる。

四月の下旬には壬生寺地藏堂の壬生念仏が行われる。これは三月十九日の嵯峨清涼寺、五月下旬の千本閻魔堂などの行事と同じ大念仏の流れで、古く壬生郷土と称された念仏衆が三十番程度の狂言を演じている。その中には、(一)土

蜘蛛・羅生門・安達ヶ原・大江山・鶴・玉藻前(殺生石)・紅葉狩・道成寺・熊坂・烏帽子折・大仏供養・夜討曾我・橋弁慶・舟弁慶・堀川御所(正尊)といった能からとつたもの、(二)炮烙割(鍋八撥)・花折・節分・花盗人(太刀奪)・酒蔵金蔵(棒しぼり)の狂言からの取材もの、及び(三)壬生狂言独特のものといえる桶取・餓鬼責・愛宕詣・大黒狩・蟹殿・山端(かんだん)とろろ・餓鬼角力・大原女・湯立・棒振りの十番、それに明治期の新作もの本能寺の三類に分つことが出来る。

大念仏は能狂言の中にとり扱われている古い習俗で仏徳による利生度益を願う行事だったので、春の鎮花祭と関連のあることが指摘されている。春の鎮花祭も花まつりとも呼ばれ、仏誕会の農耕儀礼的な意味と同じような、しかしそれ以前の段階での稲作などの予祝と災厄祓いを目的とする御霊鎮送(みたましんそう)の儀礼で、そのよき効果を念仏衆の行う念仏踊りにと盛り上げて来たのが大念仏狂言の本来のものといわれている。これについてはなお語るべきことも多いが、こゝでも仏教行事が民衆の生活と直結していたものであったことを見出だすことが出来る。

(未完)

(筆書・大正大学教授)

講演と映画のつどい

日 時 四月十六日（土）午後一時～四時半

会 場 東 京 銀 座 山葉ホール（四階）

◇ ◇

プ ロ グ ラ ム

挨 拶 小 林 大 巖 佐 藤 密 雄

講 演 徳 川 夢 声

『中 尊 寺』

映 画 『わが青春のマリアヌ』

法然上人七百五十年御忌を明年にひかえ、浄土宗教学院では、記年事業として、上のごとき、つどいを催します。

陽春四月、法然上人のはかりしれない深いところの一端にふれて、すこしでも生活の糧としていただきたいと思います。

主 催 浄 土 宗 教 学 院

後 援 浄 土 宗 御 忌 局

会員だより

拝啓 此二三日はめっきり寒くなりました。
 先月号、今月号の「浄土」御送りいただきましてありがとうございます。毎月「浄土」を送って下さるのを待っていて拝読させていただいています故、来ない月などはなんとなく淋しいものです。「童心仏心」は私は幼稚園に俸職している点、両親教育のもっとも良い話材となります。

本誌の中の童話も子供を仏の道に少しでも導びいて行ける良い童話だといつも喜んで子供にすぐに話して聞かせています。此れからももっともっと、良い童話を書いていただけます様にお願致します。今後も益々御発展をお祈り致します。

合掌

愛知県 中川諦念拝

新規会員

北海道	福岡	兵庫	秋田	山口	山形	富山	山形	岡山	大岡	静岡	栃木
成田淳正様	堤学翁様	天沢寺	須藤道夫	新妻慎三	秋葉健三	上田貞覚	中村元雄	三留辰三	鈴木篤四郎	秋本定信	牧田進
上島彦太郎	仁藤金伍	山際司	村田義雄	佐木泰夫	佐木泰夫	佐木泰夫	佐木泰夫	佐木泰夫	佐木泰夫	佐木泰夫	佐木泰夫

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一カ年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

四月号

昭和十年五月廿日
 第三種郵便物認可
 昭和三十五年三月廿五日 印刷
 昭和三十五年四月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 神谷秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

発行所 法然上人鑽仰会

東京都品川区 上 大崎一ノ七八二

振替東京八二一八七番

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。

◇お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

宗祖法然上人七百五十年御忌記念出版

浄土宗日常勤行式

○定価 一部金三十五円

十部以上（一部につき三二円）

百部以上（一部につき三〇円）

送料実費

発売中
○オフセット・美麗折本（香沢梵成師名筆）

内容（和讃勤式付）（吉田定久訳）

△香偈 △三奉礼 △三奉請 △飲仏偈 △懺悔偈 △三尊礼

△開経偈 △四誓偈 △本誓偈 △一枚起請文 △撰益偈

△念仏一会 △別回向偈 △総回向偈 △四弘誓願偈 △三身

礼 △送仏偈

東京都港区芝公園十九号地浄土宗務所内

申込先

浄土宗教化団中央本部

振替 東京六一九三九番

電話 芝(431)一三八二番

△新刊のお知らせ▽

大正大学教授 佐藤 良智 著

真理のはなたば

新書 定価 七十円

若き人びとにおける佛教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

△近刊のお知らせ▽

法然上人鑽仰会編

浄土日常勤行式解説

新書 定価 三十円

檀信徒の方々への信仰の手引書として御利用下さい

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十五年三月二十五日印刷 昭和三十五年四月一日発行

浄土

第二十六卷

第四号

定価金五拾円(送料)

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 芸術院賞受賞 香取正彦先生



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田